

女子大学生における人物画の大きさと身体満足度との関係

萱村俊哉
(武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科)

The relationship between the size of human figure drawings and perceived body satisfaction in female students

Toshiya Kayamura

*Department of Psychology and Social Welfare, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

We investigated the relationship between human figure drawing size and perceived body satisfaction by using three types of body image test; Self Rating Body Image (SRBI), Self Image Drawing (SID), and Inner Body Image (IBI) in 140 female university students. One way ANOVAs revealed that the size of lumbar width estimated by the SID had a significant main effect on the satisfaction of visceral organ estimated by the SRBI, in other words, a degree of satisfaction of visceral organ in the students who drawn the human figures with wide lumbar width was higher than that in the students who drawn those with narrow lumbar width. We discussed the reason why there was such a relationship between the human figure drawings and the body satisfaction from the viewpoint of body schema.

1. はじめに

人物画検査は子どもの知能を測定する道具としてはすでに確立され広く用いられている。人物画をこのように知能検査として用いる場合と比べ、信頼性や妥当性の面で課題が残されているが、人物画はまた性格検査としても利用されてきた。たとえば「眼を強調する」のは偏執的、注意過剰などを意味し、「歯の見える口」を描くのは攻撃性を意味すると解釈されることもある。

人物画検査では通常、人物描出の正確さや表現上の特徴を分析するが、描かれた人物画の大きさに個人の何らかの心理特性をみいだそうとする試みもある。たとえば大きな人物画を描く者はセルフエスティームが高い(Swensen, 1968)、あるいは人物画の大きさが中程度の者のセルフエスティームが高い(Koppitz, 1968)などの指摘がみられる。近年では、桜井・杉原(1986)が小学校6年生において人物画の大きさと有能感との関連について検討し、人物画の大きさと有能感の下位カテゴリーである自己価値との間に関連があることをみいだしている。彼らは、大きすぎたり、逆に小さすぎる人物画を描く児は有能感の中の自己価値が低いことを明らかにしたのである。

人物画の大きさはセルフエスティームや自己価値などの自己認知的な要素と関連があるというこれらの指摘をふまえて考えると、人物画の大きさと、自己認知の中でも身体的自己の認知、つまり身体満足度のような自己身体に直接関係する認知的変数の間に関連があることは十分に想定できるだろう。実際この点について、筆者が行った予備的研究(萱村, 2007)では、女子大学生において人物画の大きさ(像の高さ)と身体満足度(内臓機能の満足度)との間に有意な相関がみられ、人物画を縦方向に大きく描く者は肺、肝臓、心臓などの内臓に対して良好なイメージを抱く傾向があることが確認されている。

身体満足度の低さは思春期、青年期の若い女性を中心に近年顕著な増加傾向を示している過激なダイエットや摂食障害の臨床像の一つである。人物画の大きさにこのような思春期や青年期の女性における身体満足度の高低が表現されるとすれば、それは思春期、青年期を対象とした人物画検査の解釈において一つの重要な視点を提供することになるだろう。

以上のことから本研究では、女子大学生における人物画の大きさと身体満足度との間に関係があるのか否かという点、さらに、もし両者に関係があるとすれば、それはどのような関係なのかという点について明らかにすることを目的とした。果たして、小さな人物画を描く者に比べ大きな人物画を描く者のほうが身体満足度は高いのだろうか。あるいは桜井・杉原(1986)が人物画の大きさと自己価値との間で見出したように、大きな人物画や小さな人物画を描く者は身体満足度が低く、中程度の大きさの人物画を描く者は身体満足度が高いのだろうか。すなわち、中程度の大きさの人物画を描く者の身体満足度得点をピークとした逆V字型のパターンになるのだろうか。本研究ではとくにこの点にも注目した。このため本研究の統計処理では、予備的研究(萱村, 2007)で用いられた相関分析ではなく、1要因の分散分析を採用した。

また身体満足度には身体の外見だけでなく、内臓の機能など身体内部の満足度も含まれるため、人物画検査として自己像を描かせる検査に加え、身体内部のイメージを描かせる検査も併用し、それらと身体満足度との関連を調べることにした。

さらに今回は桜井・杉原(1986)の方法に倣い、人物画検査で用いる用紙に黒い枠を付ける方法(枠付け法)を採用した。これは、枠付けのない白紙を用いて自己像の人物画と自己身体内部の検査を実施すると、課題を遂行できない(すなわち白紙で提出する)者がかなりの割合みられることが予備的研究(萱村, 2007)において明らかにされているからである。枠付けされた空間の中では、内面的、隠された欲求や志向、攻撃性、幻想、内実が表現されやすいことが指摘(中井, 1970)されている。したがって枠付け法を用いることにより、被検者にとって描画への抵抗が減少し、人物画検査の課題を遂行できない者の割合が低く抑えられるのではないかと期待されたのである。

対象と方法

大学1年を対象とした心理学の授業において、以下の3種類の検査を実施した。その際、検査結果は今回の研究目的にのみ使用すること、検査は匿名であり個人が特定されないこと、検査は自由参加であり、検査を受けなくても構わないことなどの倫理的配慮に関する説明を口頭及び文書にて行った。その上でそれらに同意した者だけを今回の研究対象とした。その結果、女子大学生140名が対象となった。

- 1) 身体イメージテスト(Self Rating Body Image Test, 以下SRBI) : Tadaï, Kanai., Nakamura, & Nakajima. (1994)による19項目からなる自記式検査である。「脚のかたち」「消化のはたらき」など身体の部位の形や働きの好感度(満足度)に関して、1(印象は悪い、または不満足)から5(印象は良い、または満足)までの5件法で回答させる方法である。得点が高いほど好感度(満足度)が高くなる。
- 2) 自己像描画テスト(Self Image Drawing Test, 以下SID) : A4の大きさの紙(黒枠入り)を与え、「枠の中にあなた自身の姿の絵を描いてみてください」と教示した。今回は描かれた自己像の「像の高さ」、「頭部の高さ」及び「胴の幅」の長さ(mm)を測定することにより定量的に評価した。さらに「像の高さ」に「胴の幅」を乗じて、人物画が描かれた空間の面積(mm²)を算出した。
- 3) 身体内部イメージテスト(Internal Body Image Test, 以下IBI) : Gainotti & Antenore (1990)によって開発された人物画検査である。黒枠入りのA4の大きさの紙を与え、「枠の中にあなたのからだの中(内側)の絵を描いてみてください」と教示した。今回は描出された内臓、骨格、筋肉などの解剖学的部位(臓器)の数を数えて評価した。

結 果

1) SRBI のカテゴリ分類とカテゴリ別平均点

SID を遂行できなかった者が1名みられた(ABI は全員遂行可能であった)。その他、24名においてSRBI の回答に不備が見られたため、以下の分析は以上の者を除いた残り115名の結果に基づいて行った。

SRBI の分析に関して、Tadai et al. (1994) は因子分析により19項目をそれぞれ、体型(body shape) 11項目、顔面(face) 5項目、内臓(visceral organ) 3項目の下位カテゴリに分類した。そこで今回のデータについて、これら下位カテゴリごとの α 係数を算出した結果、 α 係数はそれぞれ、体型.749、顔面.667、内臓.618となり、ある程度の信頼性があることが確認された。そこでこれらの3カテゴリ点を従属変数とした。各カテゴリの平均点と標準偏差は、体型 27.07 ± 5.92 、顔面 12.81 ± 3.38 、内臓 8.73 ± 2.30 となった。

2) SID, ABI の平均値とその結果に基づく対象者の群分け

SID では「像の高さ」、「頭部の高さ」、「胴の幅」の3指標のサイズ(mm)を計測した。その結果、それぞれの平均値と標準偏差は、像の高さ $133.91 \pm 32.49\text{mm}$ 、頭部の高さ $29.43 \pm 7.02\text{mm}$ 、腰の幅 $22.78 \pm 6.61\text{mm}$ となった。さらに「像の高さ」のサイズに「胴の幅」のサイズを乗じて、人物画が描かれた空間の面積を算出した結果、その平均値と標準偏差は $3189.77 \pm 1512.72\text{mm}^2$ となった。一方、ABI では描出された臓器数を数えた。その結果、臓器の平均描出数と標準偏差は 3.65 ± 3.24 個となった。以上の指標の中で、SID に関する4指標では、平均値から -1SD 未満(I群)、 -1SD 以上 \sim $+1\text{SD}$ 未満(II群)、 $+1\text{SD}$ 以上(III群)の3群に対象者を群分けした。またABI では描出された解剖学的部位の数に着目し、0個(I群)、1 \sim 4個(II群)、5 \sim 8個(III群)、9 \sim 13個(IV群)の4群に対象者を群分けした。各群における人数内訳は次の通りとなった。像の高さ：I群20名、II群75名、III群20名、頭部の高さ：I群20名、II群73名、III群22名、腰の幅：I群24名、II群73名、III群18名、面積：I群20名、II群78名、III群17名、臓器数(ABI)：I群36名、II群28名、III群43名、IV群8名。

3) SRBI と SID, ABI との関連

表1 \sim 3にSID, ABI の結果による群ごとのSRBI の3カテゴリの平均点と標準偏差を示した。SID, ABI の計5指標を独立変数とし、SRBI の3カテゴリ得点を従属変数として1要因の分散分析を実施した結果、表3(内臓の満足度)に示すように、腰の幅において有意($p < .05$)な主効果が認められた。そこでこの点について多重比較(Bonferroni)を行った結果、IとIII群の間に有意差($p < .05$)がみられ、I群(腰の幅が狭い)に比べIII群(腰の幅が広い)のほうが内臓の機能に対する満足度が高いことが判明した。ただし、有意な結果が得られたのはこれのみであり、SRBI の「体型」(表1)と「顔面」(表2)に対してはSID, ABI における何れの変数も有意な主効果を示さなかった。

表1 SID, ABI の結果による群別にみたSRBI における「体型」の得点

		I	II	III	IV	ANOVA (F)
SID	像の高さ	26.35 ± 5.98	26.85 ± 6.08	28.60 ± 5.25		.86
	頭部の高さ	26.60 ± 5.19	27.11 ± 6.55	27.36 ± 4.28		.09
	腰の幅	26.08 ± 7.90	27.60 ± 5.55	26.22 ± 4.08		.81
	面積	25.30 ± 5.97	27.35 ± 6.10	27.88 ± 4.81		1.14
ABI	臓器数	28.06 ± 7.28	26.14 ± 5.32	27.02 ± 5.36	26.13 ± 3.80	.62

(注1) SID : $df = (2,112)$ / ABI : $df = (3,111)$

(注2) 1要因分散分析の結果はすべて非有意($p > .05$)であった。

表 2 SID, IBI の結果による群別にみた SRBI における「顔面」の得点

		I	II	III	IV	ANOVA (<i>F</i>)
SID	像の高さ	12.35 ± 3.05	12.71 ± 3.31	13.65 ± 3.95		.84
	頭部の高さ	12.45 ± 3.10	12.89 ± 3.62	12.86 ± 2.88		.14
	腰の幅	11.88 ± 3.43	13.29 ± 3.33	12.11 ± 3.31		2.07
	面積	11.70 ± 3.51	13.05 ± 3.23	13.00 ± 3.81		1.31
IBI	臓器数	13.06 ± 3.87	12.32 ± 3.20	13.14 ± 3.01	11.63 ± 3.70	.72

(注 1) SID : $df = (2,112)$ / IBI : $df = (3,111)$ (注 2) 1 要因分散分析の結果はすべて非有意 ($p > .05$) であった。

表 3 SID, IBI の結果による群別にみた SRBI における「内臓」の得点

		I	II	III	IV	ANOVA (<i>F</i>)
SID	像の高さ	8.20 ± 2.50	8.81 ± 2.36	8.95 ± 2.31		.63
	頭部の高さ	9.10 ± 1.86	8.47 ± 2.59	9.27 ± 1.93		1.28
	腰の幅	7.88 ± 2.27	8.75 ± 2.36	9.78 ± 2.24		3.47*
	面積	8.05 ± 2.44	8.78 ± 2.32	9.29 ± 2.47		1.33
IBI	臓器数	8.58 ± 2.89	8.82 ± 2.44	8.63 ± 2.00	9.63 ± 1.30	.46

(注 1) SID : $df = (2,112)$ / IBI : $df = (3,111)$ (注 2) * $p < .05$; 1 要因分散分析の結果は「腰の幅」以外、非有意 ($p > .05$) であった。

考 察

本研究において人物画検査に枠付け法を採用した結果、SID を遂行できなかったのは 1 名 (0.7%)、IBI が遂行できなかったのは 0 名 (0.0%) であった。枠付け法を採用せずに人物画検査 (SID, IBI) が実施された予備的研究 (萱村, 2007) において報告されたこれらの検査の遂行不可者の割合 (それぞれ 14.2%, 23.0%) と比べ、今回は人物画検査の遂行不可者の割合が大幅に減少したことがわかる。何も描かれていない白紙に人物画を描画するよりも、黒枠の中に描画する方が自己の内面を描出する上での抵抗が少なかったためこのような結果に現れたと推測され、描画検査における枠付け法の有効性が改めて確認されたといえる。

青年期は摂食障害などの精神病理の好発年齢であり、それらの病理の早期発見や予防が現代的な課題になっており、今回の研究のような人物画検査の基礎研究を今後多角的に進めることにより人物画検査がそのために役立つことが期待される。本研究の結果においても、腰の幅が内臓の満足度と関係しており、腰の幅の広い人物画を描く者は狭い人物画を描く者に比べ内臓の満足度が高いことが判明した。当初、①小さな人物画を描く者に比べ大きな人物画を描く者のほうが身体満足度が高いのか、あるいは、②大きな人物画や小さな人物画を描く者は身体満足度が低く、中程度の大きさの人物画を描く者は身体満足度が高い、すなわち中程度の大きさの人物画を描く者の身体満足度得点をピークとした逆 V 字型になるのかとの間をたてたが、この間に対して、飽くまで腰の幅と内臓の満足度との関係だけに限定される現象ではあるが、①つまり小さな人物画を描く者に比べ大きな人物画を描く者のほうが身体満足度が高いという関係がみられることがわかった。この点について予備的研究 (萱村, 2007) においても、人物画を縦方向に大きく描いた者は、肺、肝臓、心臓などの内臓に対して良好なイメージを抱いていたことがすでに明らかにされており、これと今回の結果とを勘案すると、青年期女性の描く人物画の大きさには、体型や顔面に対する満足度よりもその者の内臓機能の満足度が反映されやすい傾向があるといえるだろう。この事実は青年期臨床における人物画検査の解釈に一つの視点を提供するものだろう。

さて、それでは何故、人物画の大きさは、他者からの評価を受けやすい体型や顔面に対する満足度ではなく、他者評価の対象とはなりにくいと思われる内臓機能に対する満足度と関係がみられたのであ

うか。このような結果が得られた原因について、身体図式という観点から人物画と身体満足度の起源を論じつつ以下に考察する。

まず、本研究のSIDのように「あなた自身を描いてください」と特段の教示をしなくても、人は自然に自分自身(自己像)、理想像、あるいは自己像に防衛的修飾を加えた人物像を描いてしまう傾向がある(Swensen, 1968)ことを指摘しておきたい。それでは何故、人物画にその人自身が表現されるのであろうか。この問への手がかりになるのが身体図式という概念である。身体図式とは自己や自己と環境との関係性を理解するための生理的で無意識的な機能を持つ概念である(萱村, 2006)。身体図式は一人称で語る「私」、すなわち主体的自己の身体的基盤であり、同時にコミュニケーションをもっとも基底で支えている機能と考えられている(萱村, 2006)。大東・傳・鶴谷・山田(2004)は身体図式を体性感覚性身体表象、意味的身体表象、視覚的身体表象の3つの下位概念から成立するものと説明している。筆者はこのような身体図式の構成要素の中で、意味的、視空間的要素の総体をとくに「身体イメージ」と呼ぶことが可能と考えている(萱村 2006)。すなわち身体イメージは身体図式の中でとくに意味的、視空間的表象に焦点化した概念といえる。そして人物画はこの身体イメージの中で視空間的表象に内包されると考えられるのである。このような考えに立脚すると、人物画にその人自身が表現されるのは、人物画自体が主体的自己の基盤になっている身体図式の一部であるからと簡潔に説明することができるだろう。さて、身体イメージのもう一つの要素である意味性身体表象とは、自分の身体についての印象や満足度など価値に関する要素ということになり、今回調査した身体満足度もその中に含まれることになる。このように考えると、本研究は身体イメージの中の視空間性身体表象と意味性身体表象とのつながりを検討したものと捉えることも可能だろう。

発達論的にみると、これらの下位概念の中で発達的に先行しているのは触覚、深部感覚、内臓感覚によって支えられている生得的な体性感覚性身体表象であり、これをコアとして、生後の養育者との関係をはじめ様々な対人関係の中で言語的あるいは視覚的体験を重ね、意味的あるいは視覚的身体表象を発達させていくと考えられるだろう。つまり視空間性身体表象と意味性身体表象とはともに生得的な体性感覚性身体表象をその基礎におき、その上に多様な社会的経験を積んで構築されるものである。したがって、これら両者間に何らかの連関があっても不思議ではなく、今回、人物画の大きさと内臓機能の満足度との間には関係がみられたのは、人物画(視空間性身体表象)と身体満足度(意味性身体表象)の基底に内臓感覚(体性感覚性身体表象)が共有されていたからではないかと推測されるのである。

しかしながら、青年期の女性における人物画検査と身体満足度検査にこのような内臓感覚を介した連関が想定されるとはいえ、今回の研究では、SRBIの体型と顔面に対してSID、IBIにおける何れの変数も有意な主効果を持たなかった。この事実を踏まえると、臨床検査としては人物画検査と身体満足度尺度は互いに補完関係にあると考えておくほうが適切だろう。また今回はあくまで「大きさ」という人物画の中の一要素に限っての検討であったことも忘れてはならない。顔面の表情など人物画の内容と身体満足度との関係の検討は今後の課題として残されている。

まとめ

女子大学生 140 名に対し、①身体イメージテスト(SRBI)、②自己像描画テスト(SID)、③身体内部イメージテスト(IBI)の3種類の検査を実施した。人物画検査(SID, IBI)では用紙に黒い枠を付ける方法(枠付け法)を採用した。その結果、予備的研究(萱村, 2007)と比べ人物画検査を遂行できなかった者の割合が顕著に減少し、枠付け法が有効なことが示唆された。SIDでは、平均値から $-1SD$ 未満(I群)、 $-1SD$ 以上 $+1SD$ 未満(II群)、 $+1SD$ 以上(III群)の3群に対象者を群分けした。またIBIでは描出された解剖学的部位の数に着目し、0個(I群)、1~4個(II群)、5~8個(III群)、9~13個(IV群)の4群に対象者を群分けした。SID、IBIの4指標を独立変数とし、SRBIの3カテゴリー(体型、顔面、内臓)得点を従属変数として1要因の分散分析を実施した結果、腰の幅の狭い人物画を描く者に比べ腰の幅の広い人物画を描く者のほうが内臓機能に対する満足度が高いことが判明した。このような結果が得られ

(萱村)

た原因について身体図式の観点から考察した。

文 献

- Gainotti, M. A. & Antenore, C. 1990 Development of internal body image from childhood to early adolescence. *Percept. & Mot. Skills*, 71, 387-393.
- 萱村俊哉(2006) 軽度発達障害児における身体図式, 人間学研究, 21, 1-6
- 萱村俊哉(2007) 身体イメージの下位概念の連関: 人物画と身体満足度 人間学研究, 22, 27-30
- Koppitz, E. M. 1968 Psychological evaluation of children's human figure drawings. New York, Drune & Stratton.
- 中井久雄(1970) 精神分裂病者の精神療法における描画の使用—とくに技法の開発によって得られた知見について 芸術療法, 5, 77-89
- 大東祥孝・傳優子・鶴谷奈津子・山田真希子(2004) Asperger 症候群の神経心理学, 神経心理学, 20, 108-124
- 桜井茂男・杉原一昭(1986) 児童における人物画の大きさと有能感およびホープレスネスとの関係—枠づけ法を用いて— 筑波大学心理学研究, 8, 73-80
- Swensen, C. H. 1968 Empirical evaluations of human figure drawings. *Psychological Bulletin* 20-44.
- Tadai, T., Kanai, H., Nakamura, M., and Nakajima, T. 1994 Body image changes in adolescents I Development of self-rating body image (SRBI) test and effects of sex, age and body shape. *Jap. J. Psychiat.*, 48, 533-539.

付言: 本研究は平成 17~18 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「軽度発達障害児の身体図式と自己認知に関する臨床発達心理学的研究(課題番号 17530495)」(研究代表: 萱村俊哉)により遂行された。